2023.4.22・23

小林 由佳氏　基調講演の概要

テーマ「鈴木商店を育んだ神戸港」～創業時を中心に～

・神戸港は国際貿易港として人、モノ、情報の玄関口でもあるとともに、若い人材の吸引力となった。その一人が鈴木岩治郎。彼らの挑戦心が神戸のＤＮＡではないか。

・神戸は居留地の欧米人以外にも華僑やインド商人など国際色豊かでコスモポリタンな街。良い意味で他人の失敗に無関心、風通しの良さがあった。

・鈴木商店といえば番頭・金子直吉の快進撃で語られることが多いが、創業者の鈴木岩治郎も敏腕の商売人。長崎で菓子職人の修業を終え、東京に戻る途中、神戸港の賑わいに目を見張る。

・岩治郎は大阪の砂糖商「辰巳屋」の神戸出張所に雇われる。
菓子職人だけあって砂糖の鑑識眼に優れ、頭角を現す。暖簾分けで明治 7(1874)年に鈴木商店として出発。20 年後の明治 27(1894)年に 52 歳で急逝。

・当時は外国人商人が主導権を握る居留地貿易。リスクは高いが成功すれば稼ぎは大きい。
「当時の神戸における貿易は、開拓時代のアメリカの金鉱みたいなもの」(神戸大名誉教授・加護野忠男氏）中でも砂糖貿易は投機的なビジネスであり、挑戦しようとする男たちを引き付けた。

・1868(慶応３)年に開港した神戸港は「輸入港」として発展。輸出より輸入の伸びが顕著だった。明治期は 1893（明治 26）年から横浜港を抜いて輸入額は全国１位。海外からモノ、人、情報がどっと流れ込む。

・税関の統計では開港当初の輸入品は毛織物や綿織物などの完成品。明治 20 年のトップ３は①綿織糸 ②砂糖類 ③石油。石油は明治期を通して中枢の輸入品。岩治郎は石油の輸入増加を見越して共同で「神戸石油商会」をつくり、石油タンクを整備した。

・明治 19(1886)年、岩治郎は資力３万円以上の「神戸有力八大貿易商」に数えられるようになる。同年、土佐から出てきた 20 歳の金子直吉が鈴木商店に入店。

・原材料を輸し工業製品に加工して輸出する。そうした日本経済発展のサイクルの拠点となったのが神戸。その神戸で岩治郎が地盤を培った。それがあってこそ、金子が活躍できた。

以上

小代 薫氏　基調講演の概要

テーマ「鈴木商店が神戸の街にもたらしたもの」～ 鈴木商店と神戸の歴史・文化を再発見 関連事業 ～

・神戸には居留地のほかに日本人と外国人が混在することを認められた雑居地があり、雑居地はお互いの交流の場であった。弁天浜の鈴木商店は雑居地の東端に位置していた。鈴木商店の本店はその後、栄町通四丁目（個人商店時代） ⇒ 同三丁目（合名会社時代） ⇒ 東川崎町（焼き打ちに遭遇）⇒ 海岸通 へと移っていった。

・神戸市立博物館の明治 30 年頃の居留地の模型によれば、当時の建物は木造二階建ての洋館（コロニアルスタイル)。当時 31 歳の頃の金子直吉は（外国商館から高圧的・差別的な対応を受け）大変だった。

・大正 3 年から大戦期を通じて輸出が激増。国内の所得も上昇し内需も拡大。輸入の途絶により国内の生産能力は増大。大正 7 年の生産高は大正 2 年比で 2.5 倍、工場数も 2 倍に増加。長田、脇浜が工場地帯として発展。15 名以下の鉄工、ゴム等生産の小規模工場が増加。

・何かしらのチャンスを求めて多くの人が神戸に集まって来た。⇒ 多様性が後の新産業に繋がっていった。⇒ 金子直吉がそういったもの（新産業）を大きくしていった。

・大正 8 年頃、明治 20 年頃からの紡績業から重工業へ移行。川崎造船所のガントリークレーンはシンボル的存在。神戸市は日本の商人による貿易の取扱比率が横浜を抜いて日本一となり、貿易における商権の回復を先導的に果たしていった。

・大正 8 年の神戸の人口増加率は神戸市が第 1 位。（毎年 30%増加し、出身地は 38%が他府県、30%が神戸市以外の兵庫、神戸市出身は 30%以下に止まった）人口密度も東京に次ぐ第 2 位。神戸は外部の人に寛大であった。

・その後、急激なインフレ・物価高騰、賃金は 30%以上のマイナス、急激な人口増加、住宅不足、家賃高騰、米価上昇を招く。鈴木商店は米の安定供給に尽力していたにもかかわらず、大衆の怒りが同店に向ってしまう。

・その後、神戸は都市計画・福祉の時代へと移行。神戸市は東西に拡げる都市計画を決定。鈴木商店が活躍していた時代の用途地域がそのまま都市計画に取り入れられて固定され、現在の神戸市の骨格をなしているということが言えよう。

・最後に、鈴木商店のシアトル駐在員であった冨永初造が帰国後、木材部材を米国より取り寄せて建築した 2×4（ツーバイフォー）構法の原型をなす貴重な西洋風住宅で、登録有形文化財に登録されている深江文化村の冨永邸（冨永家住宅主屋）を紹介。

以上